

1. 発掘調査の成果

古い町割の中に多くの江戸時代の建造物が残る今井町では、昭和50年(1975)以降、15次にわたる調査が行われており、今回の調査は16次調査にあたります。これまでの調査の結果、現在残る環濠(新環濠)が掘削される以前に、環濠が掘削されていたことが分かっています(旧環濠)。

今井町の南西部で行った今回の調査では、旧環濠の西肩及び法部の一部を確認しました。環濠は調査区外である東の道路下に延びており、方位に対し北で東に振れをもたらします。幅は2m以上、濠底は確認できており、深さ約0.8m(現状)を測ります。埋土は大きく2層に分かれています。いずれも人為的に埋められています。環濠が埋め立てられた時期を特定できる遺物は確認できていませんが、今回の調査では、環濠の埋没後遅くとも18世紀には耕地へと変貌していたことが分かりました。なお南西部における旧外濠の推定幅は、約15mです。

2. 今井の環濠—旧環濠と新環濠について

旧環濠については、これまで南西部と南門付近の2箇所で確認しており、16世紀後半に人為的に埋められたことが分かっています。1996-5次調査では新環濠の下層から、旧環濠外濠の東肩及び旧環濠中濠の西肩を確認しています。旧環濠の形態については、南西部では3重、南門付近では2重に巡っていたことがこれまでの調査で判明しています。

江戸時代前期に書かれた『大和軍記』によると、「今井村ト申ス處ハ、兵部ト申一向坊主ノ取立申新地ニテ候、此兵部器量ノ者ニテ四町四方ニ堀ヲ廻シ、土手ヲ築キ、内ニ町割ヲ致シ、方々ヨリ人ヲ集メ、家ヲ作ラセ、國中ヘノ商等ヲイタサセ、又ハ牢人ヲ呼集メ置キ候…」と記されており、町の四周に環濠や土居が巡る武装都市であったことが窺えます。ここに記された「堀」が、今回の調査でも確認された旧環濠のことだと思われます。

旧環濠が埋められた経緯ですが、文献などによると、大坂にあった石山本願寺と織田信長の抗争が激化した元亀元年(1570)以降、今井は濠を深くし矢倉(櫓)を築くなど武装化を整え、信長の軍勢に備えました。その後、天正3年(1575)に石山本願寺が信長と休戦を結ぶと、今井は信長軍に降ります。その際、今井が信長命令にあった、土居構えを崩し、住民は武器を捨てて土着民に戻るという条件の遵守を誓って降参したことが、当時の今井自治組織に宛てた明智光秀の書状から窺え、その後信長に降伏が許されています。

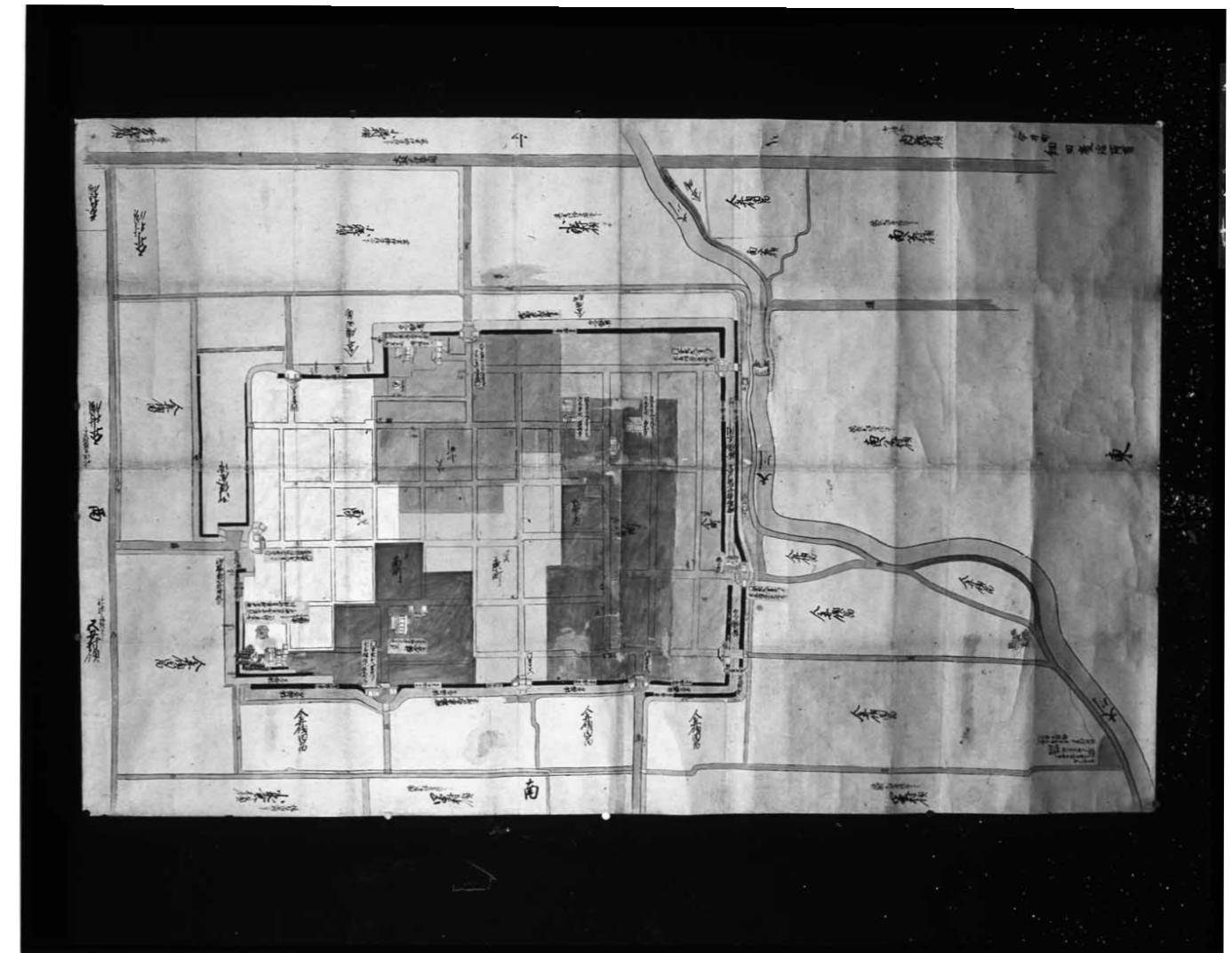
この降伏時の条件であった武装解除の一環として堀が埋められたと考えられており、旧環濠の埋没時期は、これまでの調査で出土した遺物からも大差がありません。よって今回調査でも確認した旧環濠は、いわゆる武装都市であった当時の環濠と考えられます。

一方新環濠については、南西部と南門付近の2箇所で確認しています。いつ掘られたか文献等に記載がありませんが、南西部では環濠は3重、南門付近では1重の濠が出土しており、17世紀後半に町割などと共に環濠や土居、門などが描かれた絵図の内容と一致しています。

3. まとめ

今回の調査で、初めて旧環濠外濠の西肩を確認しました。旧環濠については、南西部ではこれまで部分的に確認しただけでしたが、この調査で今井町南西部では3重の濠が巡っていた事が改めて確認できました。

今井寺内町は旧環濠の埋没と共に、寺内町から自治都市・商業都市へと変貌し更なる発展を遂げ、大和において奈良に次ぐ都市として大いに賑わいます。「海の堺、陸の今井」「大和の金は今井に七分」と繁栄振りがうたわれるほどでした。今回の調査成果は、今井町における重要な過渡期を紹介する一例です。



今井町絵図(細田家所蔵・檜原市指定文化財)

17世紀後半に描かれた絵図で、当時の町割に加え環濠や土居の幅、門などが描かれています



左：旧環濠外濠



右：今井町南西部
復元整備された環濠（3重）

